

[研究論文]

GLOBAL COMMUNICATION LEARNING PROGRAM の実践

青木俊志¹・坂場順子²

1 国際センター 国際課

2 基礎・教養教育センター

ACTIVITY of GLOBAL COMMUNICATION LEARNING PROGRAM

Shunji AOKI¹⁾, Junko SAKABA²⁾

Abstract

“Global Communication Learning Program” is an experiential English learning program opened to the students of all departments based on the notion that the acquirement of “global engineer” is indispensable for the engineers to be able to go out into the world from universities on the basis of overseas training courses which our university has so far paid much effort for and has attained fruitful outcomes, which as a result has made way for roughly three types of programs.

They are;

- (1) Overseas training course: “Long-term Study Abroad,” “Overseas English Training,” and “Overseas Specialized Training”
- (2) Domestic training course; “Interchange Program accepting Students from Overseas Partnership Schools”
- (3) Intramural training course: “Innovation of English Conversation Class” establishing “free talk time” at International Center

The aim of these courses is to foster the students who are equipped not only with the ability to make “conversation” in English but also with the experience of “communication” in English as well as the understanding of foreign culture which forms the basis of mutual conversation. This document summarizes the outline and partial outcomes of these courses, predicts the effects expected from the continuation of these efforts and indicates the goal in the future.

Key Words: Global, Communication, Overseas

1. まえがき

大学の入学生は、通常、中学で3年間、高校で3年間の英語学習を済ませている。また、カタカナ英語は毎日耳に入ってくる。「ラジオ」を「箱型電波受信機」と表現する人はいないであろう。日常的な会話文を黒板に書き、「さあ訳しなさい。」と言われて訳せない場合があっても、単語をひとつずつ拾ってそ

の意味を言わせればその場でこたえられる。つまり、彼らは十分に「英語を使う」ことの基礎はできているのである。あとは英語を使い、話すことに慣れていない、つまり伝達能力が鍛えられていないだけなのである。今までの日本型英語教育の弱点は「読み、書き」は、もちろん「聞く」「話す」ことにあるが、さらに不十分な教育は「伝達する」ことである。

社会が要請する「グローバル・エンジニア」の素養

を育成するためには、英語が必要な時に使用でき、必要なことを伝達できるように教育することである。そのために不可欠な要素は、英語を日常的に体験しながら繰り返し使用することであり、「conversation」ではなく「communication」が必要なのである。

さらに、英語が使えるようになるためには、単に英会話を学習するだけではなく、外国人と接する際のマナーおよび習慣、外国人のものの考え方、歴史的背景を総合的に学習する必要がある。そのための実践プログラムとして位置づけるのが本報において目標とする『グローバル・コミュニケーション・ラーニング・プログラム(略称 GCLP)』である。

本学に入学してくる学生は概ね英語は不得意である。これには様々な要因が考えられるが、一つには近年の本学入学生に専門高校からの出身者が増加していることが挙げられよう。その理由は、専門高校の中には英語を必修科目として配当していない高校もあるからである。そうした場合は、英語は中学校の3年間のみの学習であり、高校3年間にはほとんど英語を学習していないので、中学生の学習よりも劣っていることが予想される。普通高校からの出身者は、中学で3年間、高校で2~3年間英語を学習してくる。この結果、専門高校出身者と、普通高校出身者との英語力に差が生じている。この両者を同一クラス、同一のテキストで教育するのはいかに高度なティーチング・テクニクをもった教員といえ至難の業である。入学してくる段階で英語の学習歴、興味などに対して学生の個人差が生じているので、これを均一の限られた枠の中で教育するには無理がある。GCLP を活用することにより、学生それぞれの学習習熟度、興味などに対応し、適切なプログラムに参加させ、多様な状況にある学生のコミュニケーション能力の向上を図ることが可能である。

日本では、毎年約8万人が海外へ留学している。(文部科学省「我が国の留学生制度の概要」)これは10年前の約2倍に及んでいる。やがて、10人に1人は留学経験者となる日も決して遠い日ではないであろう。

本学では、「国際人」より「世界人」を育成したいと

の教育目標を立て、「世界」をキャンパスに持ち込みたいと考え、この GCLP を活用することにより、留学しなくても留学と同じ、あるいはそれ以上の効果が得られるよう、また、本学に在籍する学生が、好奇心を駆り立てられるような、自分の未来に大きな可能性を膨らますことができるような、そうしたプログラムを GCLP で展開することを目標とした。本報はその試行について紹介し、実証していこうとするものである。

2. 『GCLP』の概略

GCLP は、本学が従来から実施してきた英語教育に「意思の伝達手段として使用できる英語教育」という観点から、単に英語が話せる「conversation」人材の育成ではなく、話すための土台となる異文化理解を深め、体験を通して培われた英語で自分の意思を自由に相手に伝達「communication」できる能力の習得をめざすことをプラスするために、系統立てて開発されたものである。

GCLP の最大の特徴は、体験型英語学習プログラムを以下の3つのプログラムカテゴリー、すなわち、

- ①海外研修:『長期留学』、『海外英語研修』、『海外専門分野研修』
- ②国内研修:『海外協定校受入交流プログラム』
- ③学内研修:『英会話の授業改革』、国際センターでの『フリースタイル』の設置

に分類し、それらの中から、学生が参加可能なプログラム(経費、実施期間が異なる)を選択し、参加するカフェテリア方式にある。この方式によれば、学生は体験可能な時期に自分の状況に合致した体験型英語学習プログラムを選択し、あるいは組み合わせることで参加することが可能になる。これにより、学生に年間を通じて英語に接する機会を提供し、学生に英語に慣れる環境を「体験」させることになる。こうすることにより体験を通して培われた英語力(伝達力)を身につけることが可能である。

過去、多くの大学が行ってきた夏期・春期休暇を利用しての短期海外研修は、その研修期間(現地

滞在期間)中は英語を日常的に、繰り返し使える極めて理想的な環境であるといえる。しかし、研修が終了し帰国すると全くと言ってよいほどその両者の環境が失われてしまう。せっかく海外に短期とはいえ滞在し、海外での生活を通して様々なインプレッションやコミュニケーション能力を身につけ始めたにもかかわらず、英会話への学習意欲が始めたところで帰国し、その後何のフォローもできず、様々な「身に着け始めたもの」が徐々に失われてしまうという現実がある。こうしたことを少しでもくい止め、せっかく持ち始めた「英語を話す」ことに対する興味および「マナーや習慣を理解」し始めた面白さをいかに帰国後継続させていく方法として、また、海外に出かけていくことが困難な学生に対して、海外に行かなくてもそれに近い、もしくはそれ以上の効果が期待できる方法として提案するプログラムがこの『GCLP』である。

3. 具体的なプログラムの実践

本学が以前より実施してきた、海外英語研修と海外機械工学研修の実績は、表1に示すとおりであるが、過去5年間の実績を見ると、年々参加者が増加し、相当の実績を上げてきたことがわかる。これらのGCLPは、この実績に基づいて、基礎・教養教育センター等の協力を得て、さらに進化させ効果的に実践させたものである。

3. 1. 海外研修について

3. 1. 1 海外研修／長期留学

長期留学プログラムではメカニカル系留学とサイエンス系留学を実施している。

メカニカル系留学は主として機械系学科が中心となり、アメリカ合衆国ワシントン州シアトル市に所在する **South Seattle Community College** (略称 **SSCC** / 本学協定校) における工学部の科目を受講するものである。SSCC における受講可能科目を表2に示した。

サイエンス系留学は主として応用バイオ科学科が中心となり、SSCC における「**Biotechnology・Biochemistry**」コース等の科目を受講するものである。受講可能科目一覧参照を表3に示した。

学生が本学に在学のまま長期留学する場合の壁はいくつか存在する。例えば、TOEFL のスコアが留学先大学のレギュラーコース入学基準に達しているのか、留学中に修得した単位をいかに有効と取り扱うのか、授業料や学籍をいかに取扱うのかななどである。特に本学のような工科系の大学では英語を得意としている学生は少なく、TOEFL スコアが留学先大学のレギュラーコース入学基準に達することは難しく、ESL コース (TOEFL スコアが留学先大学のレギュラーコース入学基準に達していない学生に対して英語の集中講座を行う機関) のみを履修するような留学となる可能性が高い。ESL コースのみでの留学では、本学の単位に振り替えることは難しい。

表1 海外研修参加者数

	海外英語研修参加者数	海外機械工学研修参加者数	海外バイオ研修参加者	海外自動車工学研修参加者	長期留学	合計
2001年度	12	2				14
2002年度	19	14				33
2003年度	31	22				53
2004年度	39	17				56
2005年度	40	10			1	51
2006年度	31	17	7	5	1	61

表2 SSCC においてメカニカル系留学プログラムで受講可能な科目一覧

Course	Course Title
ABR 111	Introduction to Automotive Collision Technology
ABR 112	Safety and Environmental Practices
ABR 113	Welding and Cutting
ABR 173	Restoring Corrosion Protection
ABR 181	Electrical and Electronic Systems
ABR 183	Mechanical Systems
AUT 100	Basic Electrical Systems
AUT 102	Advanced Electrical Systems
AUT 104	Automotive Electronics
AUT 106	Basic Power Accessories
AUT 110	Clutches, Manual Transmissions & Transaxles
AUT 116	Air Conditioning and Heating
AUT 118	Automotive Transmission Diagnosis & Service
AUT 122	Steering & Suspension
AUT 124	Tires & Wheel Alignment
AUT 126	Basic Break Systems
AUT 128	Basic Auto Engines Gas & Diesel
AUT 130	Auto Engines in Car
MVM 100	Introduction to Automotive
BUS 113	Diversity Issues in Business
BUS 140	Customer Relations
CSC 100	Beginning Computers
CTN 120	Databases I
CTN 131	Intro. To Computing Programming
HDM 101	Intro. To Heavy Duty Diesel Repair
HDM 102	Electronics, Basic
HDM 104	Batteries, Generators and Alternators
HDM 106	Cranking and Lighting Systems
HDM 107	Hydraulics
HDM 128	Gasoline Engines
EGR 110	Engineering Orientation
EGR 111	Engineering Design and Creativity
EGR 123	Introduction to Engineering Graphic Design

表3 SSCC においてサイエンス系留学プログラムで受講可能な科目一覧

Course	Course Title
WIN 101	Introduction to Enology
WIN 122	Wine Chemistry and Microbiology
WIN 123	Sensory Evaluation
CHE 101	Chemistry
CHE 102	Chemistry
CHE 103	Biochemistry
CHE 105	Intro to Food Science
CHE 111	Applied Biology and Chemistry

このプログラムは、在学中に海外協定校へ長期留学する際、特別協定に基づき TOEFL スコアがレギュラーコース入学基準点に達していなくても、レギュラーコースにおいて一定の科目が履修できるというものである。メカニカル系とサイエンス系の両留学ともに3年次後期に配当し、カリキュラムにより事前教育から帰国後教育までを一還した授業科目として構成した。これにより学生は、留学後最初の1学期(秋学期/9月末～12月末)に ESL(英語集中講座)コースを受講して英語力向上に集中して学習し、2学期(冬学期/1月初旬～3月下旬)に予め本学と協定校との間で合意されたレギュラーコースの中の決められた科目の中から希望に応じた科目(実習中心の科目)を受講することが可能となる。履修したレギュラーコースの科目は本学における単位認定の対象となる。

3. 1. 2 海外研修／海外英語研修

海外英語研修は夏季および春季に実施している。

夏季はオーストラリア国西オーストラリア州パース市に所在する国立エディス・コーワン大学において、春季はアメリカ合衆国ワシントン州シアトル市に所在する州立ワシントン大学において、それぞれ3週間および4週間滞在し、各36時間～42時間の座学による英語研修、および文化研修を行っている。文化研修とは地元警察署、高校、老人ホーム、ボランティア団体などの視察を組み込んだ研修のことである。

3. 1. 3 海外研修／海外専門分野研修

海外専門分野研修として3種類の研修を実施している。それらは、機械工学系の学生を対象として実施している「海外機械工学研修」、バイオ系の学生を対象として実施している「海外バイオ研修」、および自動車工学系の学生を対象として実施している「海外自動車工学研修」である。

「海外機械工学研修」と「海外バイオ研修」は「春季海外英語研修」と同時に実施し、滞在期間の前半は州立ワシントン大学にて英語研修を行い、後半から SSCC にて機械工学またはバイオ科学の実習を実施するという複合研修プログラムである。

「海外自動車工学研修」は英語研修は実施せず、自動車工学に特化した研修をイギリス国オックスフォードに所在するオックスフォード・ブルックス大学にて実施している。研修は全てに本学全学科からの参加が可能である。

3. 2 国内研修について

3. 2. 1 国内研修／海外協定校受入交流プログラム

国際教育交流を通じ学生の国際性を育成するには、文字通り交流を行うことに意義がある。こちらから相手国(協定校)へ出かけるばかりでは真の交流は図れない、さらに、出かけいくことが困難な状況の学生も存在する。このために GCLP では、SSCC とすでに過去3年間にわたって、毎年それぞれテーマ

の異なった訪問プログラムを実施し、国内における国際性の育成を図っている。

第一回目(2005年8月)の訪問プログラムではSSCC 学友会幹部と顧問の教員による日本の大学組織視察を目的とした訪問を、第二回目(2006年6月)はSSCC 機械工学科の教員による本学機械工学科との交流を、第三回目(2007年5月)はSSCC バイオ学科の教員による本学応用バイオ科学科との交流をそれぞれ実施している。SSCC からの訪問中は本学学生による海外研修成果発表プレゼンテーション、授業などへの参加、学外施設などの訪問に本学学生が同行した案内などを実施した。プレゼンテーション、施設訪問同行・案内などは英語で行われる。

3.3 学内研修について

3.3.1 学内研修／英会話授業の改革

本学が従来から実施してきた授業科目「英会話」の授業形態は1コマ90分を週1回受講するというものであった。英会話学習は言うまでもなく、英語を日常的に体験しながら繰り返し使用することが一番理想的である。そこで本学では従来の受講スタイルを、1コマ40分を月曜日から金曜日までの間に3回受講させるという方式に変更した。「習うより慣れよ」を具現化した方式である。英会話は「conversation」ではなく「communication」であるという考え方のもとに、話すための土台となる異文化理解も学習し、英語で相手に伝達(communication)できる能力に必要な基礎知識の習得に努めるようにした。

3.3.2 学内研修／国際センターでの「フリートークタイム」の設置

本学では国際交流の場として留学生と日本人学生とが交流できる「国際センター」(Cross Road Café)を2006年4月に開設した。現在では毎日50人以上が利用する空間となっている。

この国際センターに、ネイティブスピーカーとの気軽なおしゃべりなどを通して異文化や英会話を総合的に学習する時間として「フリートークタイム」を設定した。効果的な英語教育は、毎日、少しの時間でもよ

いから英語を使うことである。

フリートークタイムは1日40分×2回を毎日確保している。この時間中はネイティブスピーカー1名が常駐し、学生からの質問や、気軽なおしゃべりに応じている。また、ネイティブスピーカーには欧米の習慣およびマナー、欧米人のものの考え方、歴史背景などをさりげなく伝えてもらうようにしている。学生にとっては、リアルタイムで相手に伝えたいこと(communication)を英語で表現していく訓練となる。

4. 今後のプログラムの展開

4.1 海外研修について

4.1.1 海外研修／海外専門分野研修の拡大

海外専門分野研修に情報学部3学科を追加し、「海外情報学研修」として実施する。ベースは既に実施している「海外機械工学研修」と同じく、「春季海外英語研修」と同時に実施し、滞在期間の前半は州立ワシントン大学にて英語研修を行い、後半からSSCCにて情報学の学習および情報関連企業の視察を実施するという複合研修プログラムであり、2008年度実施を目指している。

4.1.2 海外研修／国際インターンシップ

国際インターンシップでは2つのコースの準備が完了している。1つは、アメリカでの長期留学プログラム参加時の最後の1ヶ月に現地企業でのインターンシップを行うというものである。もう1つはオーストラリアに所在するNPO(環境保護関連)へのインターンシップである。オーストラリアでのインターンシップは学生の都合に合わせて1週間以上の参加が可能である。

国際インターンシップは、様々な機関で実施されているが、それらは多くの問題を抱えている。一例を挙げると、国際インターンシップ参加希望者は渡航前に一定の英語力(TOEFL-iBT 61点レベル)を要求され、英語力が不足している場合は渡航後英語研修を受講し、インターンシップを行う上で十分な英語力があると判断されてはじめてインターンが可能と

なるシステムである。いずれの場合もインターン先は事前には決定されず、現地において現地機関によって適性(英語力、多少の専門知識など)が評価され、合格した場合に限り、インターンシップ受入可能企業の中から相手先を決定するというシステムとなっている。本学の場合、このシステムでの実施は学生の英語力から判断してかなり難しい。また本プログラムを将来正規科目として単位認定も可能なプログラムに組み入れることを考えると、インターンシップ派遣先企業も工科系企業であることが望ましい。本学が実施する国際インターンシップと既存のそれとの大きな違いは、渡航前に参加学生の英語力に関係なく事前にインターン先が決定しているという点である。2008年度には試行として実施する。

4.2 国内研修について

4.2.1 国内研修／海外専門分野研修 at KAIT キャンパス

上述したように、こちらから相手国(海外研修)へ出かけていくことが困難な状況の学生も存在する。

海外専門分野研修 at KAIT キャンパスは海外協定校受入交流プログラムの進化型として、海外専門分野研修とほぼ同じ状況を本学内にて実施するというものである。これによりいままでも諸事情から海外研修に参加できなかった学生が、その一端を体験することが可能となる。具体的には現在実施している「海外バイオ研修」のバイオ研修部分を本学内で実施するもので 2008年度に試行することにした。

4.2.2 学内研修／e-Learning システムの活用

本学既存の e-Learning システムを活用し、国際センター内に e-Learning システムを設置して、自学自習を可能とし、e-Learning で学習した疑問点等を「フリートークタイム」でネイティブスピーカーにフィードバックして学習できるシステムを構築する。2008年度運用開始を目指している。

4.3 学内研修について

4.3.1 学内研修／教育成果の評価体制の確立

参加した学生の教育成果の評価体制を確立する。具体的には、GCLP 参加学生に対して、プログラム参加前と参加後に SLEP テストの受験を義務付け、スコア比較によりそれぞれのプログラム参加者別にデータを取り、プログラム別による学力の伸びを把握するとともに、将来本プログラムに参加を希望する学生への個別プログラム選択の際の目安に利用する。これには現在実施している新入生全員に課すプレースメントテストと連動し、実施することが可能である。

また、神奈川県内工業高校・大学連携推進協議会(神奈川県内に所在する工業系専門高校17校と神奈川県内に所在する理工系学部を設置する7大学が加盟)へリンクし、GCLP への参画を促し、高等学校と大学との体系的な英語教育の連携をはかる。具体的には GCLP の海外研修にある英語研修の部分、国内研修などに高校生を参加させ、高校教諭も交えて、大学生との合同学習体制を確立させる。

5. 考察

海外研修(海外英語研修、海外機械工学研修、長期留学)は、実施開始から既に相応の期間を経たため、参加学生への効果が幾つか現れてきた。

効果を測定する方法としては各プログラム参加者に、各プログラム別の参加前と参加後、あるいは参加1年後、2年後といった段階で相応の英語力確認を行い、その成績の伸び率などを追跡調査する方法を計画している。本報では、従来の傾向を知ることが目的に、2003年度春季海外英語研修および2003年度海外機械工学研修参加者39名に対して分析した。

5.1 調査対象および方法

5.1.1 調査対象(特定年度の参加者全員)

2003年度春季海外英語研修および2003年度海外機械工学研修参加者39名について、参加時

の学年末および1年後の所属学科での学年順位の変化について調査した。

5. 1. 2 調査対象(学年順位の伸びが顕著な学生)

過去4年間の参加者のうち、参加時の学年末と比較し、参加1年後の所属学科における学年順位の伸びが顕著な学生7名を選択し、卒業年度までの学年順位および進路を調査した。

5. 1. 3 調査対象(特徴のある経過をたどった学生)

過去4年間の参加者のうち、参加時の学年末および1年後の所属学科における学年順位の伸びはあまり認められなかったが、その後の大学における活動、就職等で特徴のある結果が現れた学生を活動内容、就職に至った状況および進路先を調査した。

5. 2 調査結果

5. 2. 1 特定年度の参加者全員の教育効果への効果

特定年度の参加者全員に対する教育への効果をみるために、図1および図2に成績順位の変化を示した。図1には、研修参加年である2003年度の学年末の成績順位の平均と、参加した翌年度の年度末の成績順位の平均を、全体の最低順位を100位に換算して示した。また、図2にはそれぞれの順位分布を示した。全体的には顕著な変化は見られていない。

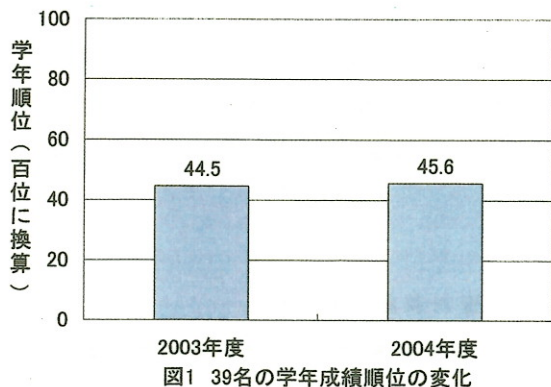


図1 39名の学年成績順位の変化

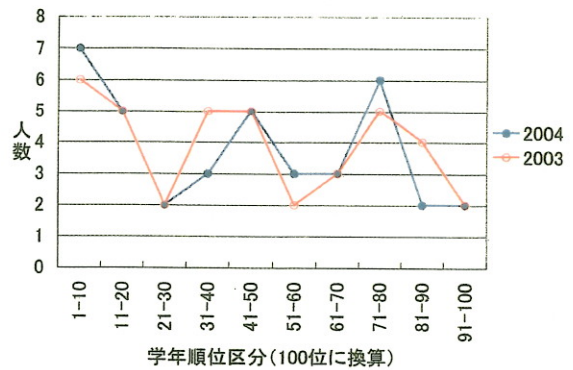


図2 39名の学年成績順位の変化-順位区別

5. 2. 2 成績順位の伸びが顕著な学生

過去4年間に参加した学生の中で、参加時の学年末と参加後の比較を行い、参加1年後の所属学科における成績順位の伸びが顕著な学生7名について、卒業までの所属学科における学年末成績順位と進路先について追跡調査し表4に示した。

以上より、海外研修に参加したことが起因とは断言できないが、ある程度の刺激を受け、学習意欲の向上をきたし、それが学年成績順位となって現れているものと推察した。ただし、その翌年には伸びが見られない学生も見受けられることから、海外研修参加後のフォロー教育が重要であると考えられる。

5. 2. 3 特徴のある経過をたどった学生

このカテゴリーの学生の海外研修参加後の経過をまとめて表5に示した。同表から、海外研修に参加したことが起因して学習、活動意欲を促したことが明らかである。

表4 学年順位の伸びが顕著な学生

所属学科	性別	参加年度末 学年順位	翌年度末 学年順位	卒業年度末 学年順位	進路
機械工学科	男	55	27	28	日本精機(株)／2部上場
機械工学科	男	152	83	在学中	(株)ヨロズ(内定)／1部上場
機械工学科	男	135	109	108	(株)セコミック／2部上場
システムデザイン 工学科	男	15	8	8	神奈川工科大学大学院 本田技研工業(株) 内定
応用化学科	女	151	94	113	神奈川工科大学大学院
情報工学科	女	77	2	40	(株)福田組／1部上場
情報工学科	女	143	30	81	(株)バイタリティ／未上場

表5 特徴のある経過をたどった学生

所属学科	性別	参加年度末 学年順位	翌年度末 学年順位	その後の経過
システムデザイン 工学科	女	1	1	本学卒業後 SSCC へ留学
システムデザイン 工学科	男	12	11	本学卒業後 SSCC へ留学
機械工学科	男	13	7	インターナショナル・クラブ設立。初代会長に就任。ハイ・アクティビティ賞受賞。 (株)小松製作所入社。
福祉システム工 学科	男	92	97	翌年休学し6ヶ月間留学。 留学決意前の就職活動では就職希望企業(JR東日本、JR西日本)は不採用。 留学後、再度受験。両社共に採用決定。JR東日本に入社。

6. あとがき

本プログラムによる分析結果だけでは十分ではないが、海外研修参加後には著しい学習意欲の向上や、コミュニケーション能力の向上が見られ、結果として希望企業に就職できたという夢の実現を可能とした学生、本学卒業後、活動の場を海外に求め留

学した学生など、GCLP の取組目的である「好奇心を駆り立てられるような、自分の未来に大きな可能性を膨らますことができるような」を見事に具現化させ始めている。

昨今の学生気質、若者への批判は事実その通りであるが、それをどのように解消しようとしているのか具体策がよく見えない。文部科学省、初等・中等教育機関、高等教育機関、家庭、社会においても、具

体的な対応方策が見出せているようには思えない。

本プログラムは、問題が多いとされている現代の若者の心に、まったく別の視点、方法で刺激を与え、“何か”を動かし始めさせることもその目的のひとつとしている。

人が心に刺激を受け、感動し、何かを変えようと思うことは、人の言葉、書物などでは十分とはいえない。そこに、今まで出会ったことのない圧倒的な風景、空気、状況などが必要不可欠であると考え。よって、従来の英語教育に本プログラムを融合させ、様々な方向から本学の学生に刺激を与え、何かを変えようと考え始めるきっかけとしたい。

また、今後は有効性を証明するために、基礎・教養教育センターとも連携し、定量的な判断が可能な方法を検討する。同時に過去5年間の実績を整理して、改善を図る。

おわりに、本プログラムを試行する中で、学長室事務長塚田博之氏の多大なる協力をいただきました。ここに深く謝意を表します。

参考文献

文部科学省「我が国の留学生制度の概要」
1993年度版～2003年度版